

クビレオゴノリの増養殖試験 - 1

一技術改良試験報告一

専門技術員 瀬底正武

本試験の詳細は、昭和62年度技術改良試験報告書において、(別刷り)報告したので、ここでは目的と要約だけを記す。

1. 目的

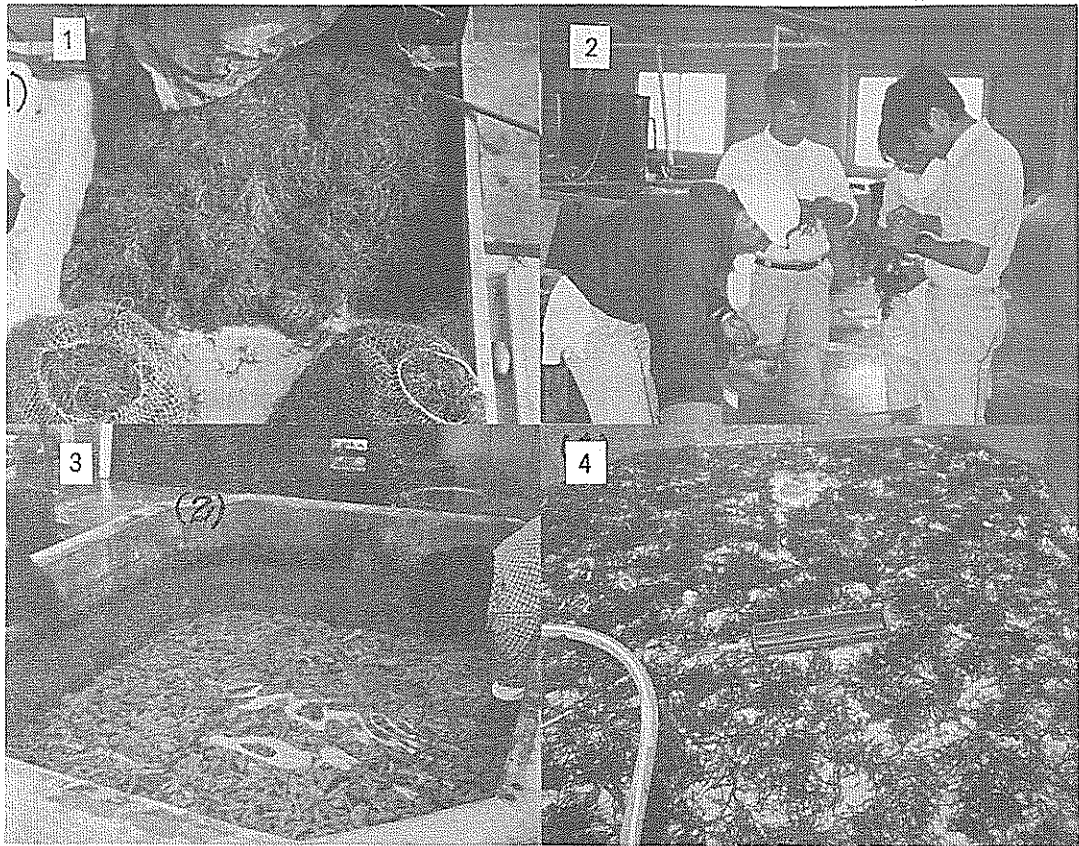
オゴノリは、近年工業寒天の原藻や加工原料として、需要が高まり市場価値も以前に比べ高価になり、また、沿岸漁場では着業の組合せによる複合経営への取り組みとして、モズク養殖が大半を占めてきたが今後は、さらに複合の組合せが必要である。その、組合せとして換金性の高いクビレオゴノリが一部地域で生産されていることから、同種を技術改良試験課題として取り上げた。

有用藻類の増殖については、積極的な胞子付けが研究されているがオゴノリでは数年来各県の水試等によって葉体の挟み込みによる延縄式養殖試験が実施されてきた。胞子付け試験としては、小味山他及び松川の試験があるがいずれも積極的な胞子付から集約的な養殖までには至っていないようである。昭和61年度の予備試験で果胞子付けによるコレクター採苗を試みある程度の知見を得た。昭和62年度は集約的な養殖を行なうことを目的として、網ヒビ及びネトロンシートによる養殖試験を実施した。ここでは、コレクター採苗による予備試験も含めてその概要について報告する。

2. 要約

- 1) オゴノリの集約的な養殖を行なうことを目的として、養殖に関する種々の試験を実施した。
- 2) 囊果から放出した果胞子は、直接コレクターへ落下底着することが分かったため、採苗は底面散布方式による採苗方法を採用した。
- 3) 発芽体の生育は、9月以降特に翌年の1月～3月にかけて、急速な生長を示すことが分かった。また、夏の期間(5月～9月)は盤状体からの立ち上がりはみられなかった。
- 4) コレクターの生産見込み量を(5,000コレクター×100g)×20% = 100kgに設定したが目標達成までにはいたらなかった。
- 5) 移殖放流以前の問題として、漁場管理のあり方や生産グループ等の組織化について十分検討する必要がある。
- 6) オゴノリの養殖サイクルからみて、海中での長期保存は困難であるため、網養殖については問題がある。
- 7) ネットロンシート養殖については、ある程度養殖への可能性が考えられるので、63年度のコレクター垂下養殖と関連して検討したい。

- 8) 果胞子の放出促進として、干出処理が有効であることがわかった。
- 9) 有効な干出処理時間は、4～8時間で多量の果胞子の放出がみられるのは、6時間であった。



< 写真説明 >

- (1) 4月～5月にかけて収穫された天然産オゴノリ
- (2) 藻体投入前の嚢果形成状況確認作業
- (3) 採苗タンクの底面にコレクターを1個1個敷つめている所
- (4) 干出処理後コレクター上部への藻体の投入と同時にドブ漬採苗開始